是此菜こそ仏法の中にも一切連なの仏也
に此菜人は右近の菜なり浄土宗には禅宗にも
余宗にはあらで又は難有べからず色は法師経
に是好良薬今留在此長則漢生不老なりとう
法経へり彼は此の方便として飛ふるさ如く人も
是と薬によりをて手がらのよき事もはやく生
己になからせて醍醐味の妙理と変するを
紫胡徳此程よりきこしくさぞられとのくわら
よき菜にもあらわざるといふみなく所よ先いに
骨髄にしみわたりてかうぞく まれ毛もふさいがら

されバいづれも手を合せ何弁わかんさえもかく
なれかれすくれらまくてるそく人もとかくの療
治みるまて治をうせるその余の宗ちやのくらせ治
つまりをでらぬ奇特と自おかりかんするら治し小
傘徳とそのまゆへさらぬ三衰の治効あるそや暗に
らく他えし治のまれぞいひわきまれバ何弁学
て一派のおほしめしのなりかまだ八の生きるを
専ら上かれと信まてるとなら治もなくてや
常ほよんぞらくしよ徳まハ病人かうべきさし
あやまて

なしわされましつましさきれ内服を
不老不思議なるをといしやどの
くいひてよろこびされぞ行弁
係院換外消するの老のしれ抄ず
なむ弥薬とんぞあるべき
といひをて悔るまてとにおろかなりけりの我
宗をいちがいよれりひへさらなれバかれ念佛
のましアさるてよりかくなげき者ありておる
りひねいりわしよりされそうくれぞろしき蔓
みらうしこそうなるべし　柳枝病人なく復さし

後禁酒乃誓ひを立給ふあまてらく中あらそひしそ
とかや

あはれうらやまし三蔵の給ひしも
我門さけに貪着ならせ給へ

悟後法も

人さかさかちらん法をむすびの行なれともそて一体
乃出合倒のまへ条妙典といひ出しても見ひと
法ある門にはのりけるかとよ後八念仏亞も禅天
魔変として□羅て悪口をされどもわ為に是非
のしりはわけ給くすくされらまてこそなりけれ

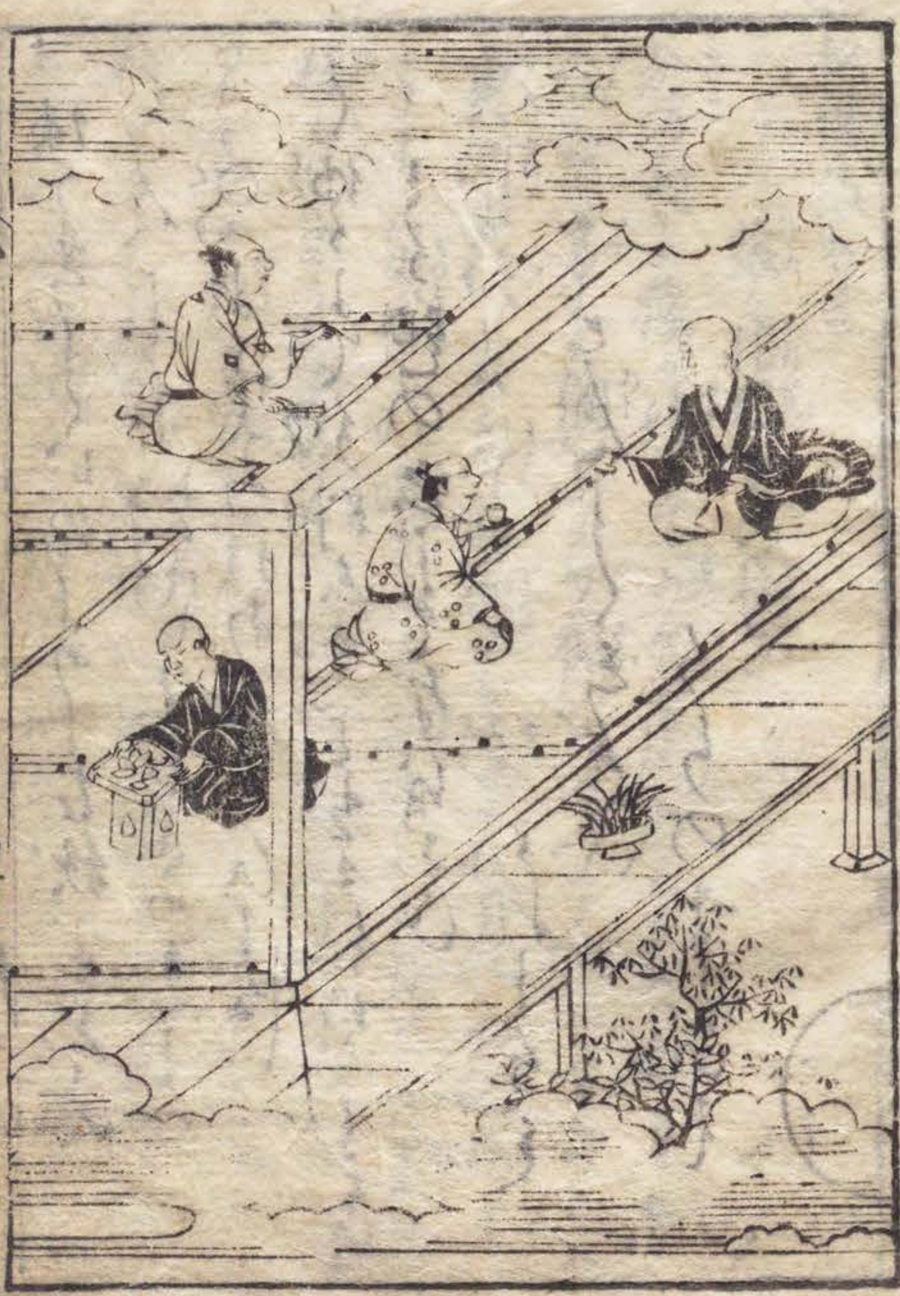
任らくハ恵傳しさやのくすあはしかき〳〵とも我
をそちしも親のもくぬこうしやうようく法
師とありつるれバ今更何ともきさまんくるすも
おくと日蓮しの弟子をくよて世とするら小僧
まてはならさほとかおきしもとせまくの関山
いうぞの気根つよくましく〳〵まやや此房祖師
も九年面壁とて九年のあひさ壁に向ひ給ひて
いそぬ内気ものまて徳の気のまされまれらりま
て隠かゞ隠よて山里をえらむりつしひすよハ
頓悟あの柏樹枝をもとらさく法緒をとしきしるわつ人ま

一字不説とうかゞひて気随ものまでくハ只寂
来らふとて吟香をうつりがをあてゝど試行令
死生得へじやう命を申んの修ひてむつまふ
身体とわりり給へど柳ハみどりのお花ハ紅まで月
見給とうまていとあれど男まで仏法の上ハとも
あれりし意衆うれこるさらいふなうらしまれをや
いざこれどきうんと色しゆきけう一体なりしくとをま
らひあひて
猛あらじ止観の窓の戸をおけバ
じゆうことくしして月ともぬされ

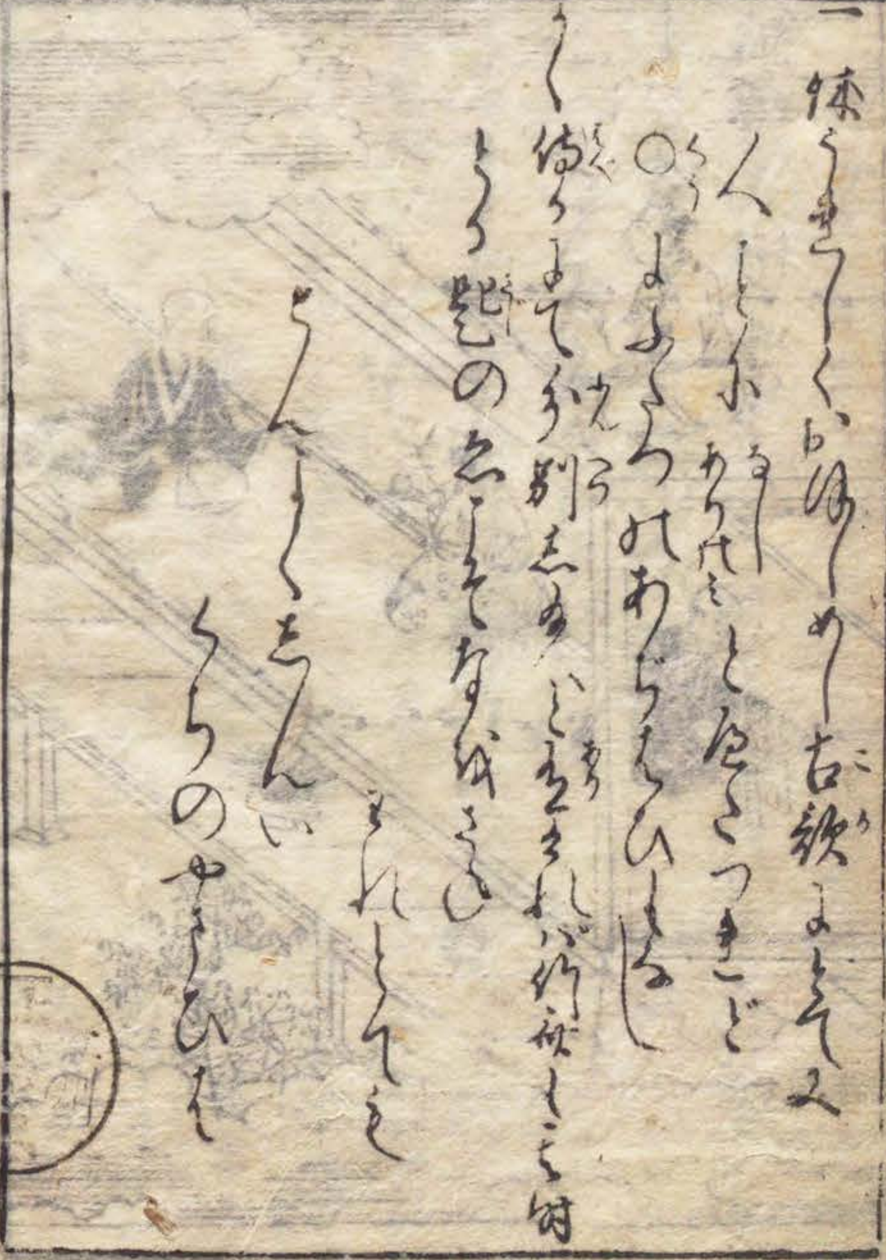
くわてくいしよれど行所しそけいそうく
あやしごとしよれどえんしぬごゆとゞへの
どゆうれこもさ給へえまとくうし
とりひらりしよ男合ハ禅とわをして分りると
うらうまつきいまなくともあてこうしとあひあう
そのすす禅方のしやくれこつさゆへ行り招くへで
あれば不招へもうしゆとふのハこれといふなる
為しうて
ハ禅あゆうれこゝろをとめてしとくらく
きうらやうさきん百ハの蝶数

とつても我宗様の眼目よなりけれハきらんといふべし
一体よしてめしそれ方の宗旨も此方の法縁ま
みる人ひとり何かまよくハさらりとすぢさけんとこ
そひとるなり是よ何事もおそくしきくかさ
ゐめて医者もおろしく仏するべし一二あくの
薬よ効なきとよるて病の根をとりてくるべし
てあまた是して紅ありこれ諸宗ハ大病にあつて
あやうきとよあらん法縁又やくにたてし只称
へもいろくさしあふそれ方の宗まてさとら
す八深く禅宗しあるときハ座禅不退の

くもなれども善悪無記の全体ハ己身のかり
念法なることゆゑ自他を不別是道場ともし又
も娑婆即寂光或即身蔵仏九界即仏界か
とくしとわきまへ又かうしいの余経ハ玄此不達
己身の法華経唯心の浄土をすくふひて法性
正直捨方便しあくへバ皆悉捨平等無二無三其中衆
生悉是吾子何とも播て何とも去しむ念き
教外別伝不立文字以心伝心見性成仏とむつて
しれんぬれ根やも一万事ハ皆宗となりて
くよらうきとれハかよらぬれわりてして



くいらもしれぬかくきぬもみと
高野山数他と笑ゆしかしく唐人の家の様
よハ々座さへ大方此々住らてゆるして
めぐりあひゆくやそれともしらぬまゝに
まよひとをとも胸の月 しね



一休かくしくハおぼしめし古歌によそへて
人しかるべしとおもひつきこど
○くうよみられわらぢひしほし
く待りて為別志あいとはまれバ何故もち附
にる記の名をそてなすべきさし

きれしもを
らんしもちん
くらのゆきひた

秋楊枝巻三

猿が池殺生の禁

都の西に猿が池とておかがは流れの義ハ殺生禁断にて常に網とらず棹とのぶる人もなけれバ魚鱗ハにたどり岸の柳も波にあらん泉流清くさもていはぬ布れ流とたより砂のうえに月を玉をゆの林もさるがら桜おすまバ桃花の芳舎の比京かこよある宴に興をと来て曲水の盃をうかぶる廣沢乃秋ともとくあかと此一休和尚ハ此所へ納涼のためめぶ所秋を続の世話ひさ波ぐれたのしみとなして

江州 日吉 草見 (stamp)

ふハだん天の雲よりとびおりける波よりうかむ浮瓢箪
うき出させ給ひていざや竹林山池の魚をとらん
てらはゑり八幡の鳥は菌して宮をさんと仰きを
まバおとされ去るぞれ竹林人余所の月もおもさ
まぞ流るゝぞとりま小房給うげ一体のめし多は
衣をひ流るゝりあひて魚を追てぞさまよひける
給給ふ初りて里人あまりかゝり何もれなりぞと
よりむひまでもいかれ遊云とかく右聞も流ぞ
さるゝ縁でてんあまた月れさるゝまれそなり
流しんと

村中の人をよびあつめ見れバ皆よく〱松どもとかし
てくまで〱よ拝みて噪ぎて大勢
あつまりて皆く〱此を担をきれたりしむる
なる人々二人まちろなる者をたへひろげ奥
ともらひて酒瓢の中へぞ入れる翌の人皆拝
をんてうは殺生禁断の地に寄りけるを
おりまかして私代未曾有曲事なるそれからめされ
とぞとめきける一体何者人をよおそろきあるの
殺生禁断のことをもつとゆ白状のすとてかくれ
色かれとあらそひをもりぬれどる変は偽もいれなし

それ翁ないしはそ是悲なくれとかの獄にしておき
くや縄をそて掛けり一体氣色をうへあらりを
おしみ作をうハこそ口惜おもさ侮られ仏法のよ不
男命下を捨つハ出家此望する事ども一大事乃
松云乳もこそ何の用よある知ぬ愚人をうら起
不せしてそ無念なるこい祢がてくハ天神地祇も
力を添降伏の神をなていちゃくま此奴原は蹴
殺さるゝや南無梵天帝釈王大情沙門集て大
事がひくうちおめき神は村の者とも腹を立かる
精気を破りとなぞ殺生の梵天此外にて戒お

と調伏せらるゝのみこそ拙のよみ料簡へしさくいはく
遺恨深く頭剃落して出しめ給せんとぞ
きゆりまけり一体も今ハいへども力落し見かくと
振ひるめるらぬ絶拂絶令生死室に完るべ今一度
練てもとりやく膝の皿をも立作けるハ汝おもとまれ
愚癡無智なる者どもに学せて罪悲しもきまじ
されども我く死して後悔をくさが痛しさに
ありく消て学ちるなりそれ我宗の祖師よ
しそ法華を唸ひて愛明なる眼を開き後
のちらべをうかりてたゞ悟るの智者となり

給ひされども今ぞ生れ愚僧ぞらしも奥をとり為ぞれ
気合ねれなめるハおもへど夏百日の万春荒風雨
のはらいなし悉得仏果の祈を取と立て三世の
諸仏よう云ハ絹まつくわこともなし愚僧が拙きひ
の手に照て奥ハ紙一瓢まとり入てハ魚生飛鳥草
木までも悉皆成仏と仏果ハ我わするゝ又山林の獣物
まれ如是畜生発菩提心と廻向ハすて殺さる
まじ殺生をするべきまで子細ハなしされバ仏も九界の
衆生ハたゞそれぞれのちるひれ潤ひと三途川よより
ひろきとそ六道輪廻の巳為ハまとらひをまするよ

罪ふかきものハかならず底をとり深ハかならずしもなり
此大網にかゝり行ゆく人ハ迷ふに極楽浄土へ生るゝこと
うかゞゆく人に常にしへのとむらひをすゝめかへさや
仏ともの世給へやうさ物菓と称ひしゆうこそこの
あらそれゆゑにまつてさやうハやりさき八網ひく一
筋の大つなに十文の薪もおもにしをとらへて実
おもしろの大海より安楽世界の浅きまでし
りせ給ふ則弥陀の浄名ともいふ仏在世の時
も縄闇陀仏とよりしが末世の童男童女
無癡無智の者経文をまつてハ唱ふるなるべし

よろこびおもひさ仏となしへとさせ給ふなりされのとかう
と大活字ありしきむ里も渭濱の波に禅をとへ宗へ
業必死の鱗ととりあつむ膾ハ細にきいとにまさそて
ほどこしに切てやまざきあへにてはたらかのさとまる世親
子一家の孝味なれども天窓とかわ給ふにて賢なれ賤
に唸は学述光満の明法にうらまし是ハ河ても妓
たとしけなるべき抑此一紡れハおこりハとにへバ仏法
なくも智恵中一の文殊菩薩文殊にたる練して
妙法蓮華経をとなへバ竜女剣なくもとれ方とへんじ
角と脚下のたに理南方無垢世界に生とうまれ

是ハ娑竭羅海中唯常宣説妙法花経と自讃し
給ふ嗚呼あさましくてふし恐れさハ拝持さんさへあるよ
て佛のまねをなさるゝよして法花経をいふ世あれ
てかくはた難よおもひのち百日の乾白もせしものも
なくなりてす善人魔乃ち民京仏性同ぬの
沙門をまつり十悪の中の悪にハ科ハ犯すのミ
なるを小実の命下といひて三施一貝の人なるを
こりをと長なるかしくされハ仏の戒よ日滝を
教し或ハ仏のみちとつし世を生しの和滝の
傍経破もし文と教し母をてつも是とて雅五

の種と出家ハ仏果の歌なしをや浅ましくも此村九
百姓京至間此座よ洗んてうぬ世更よみえべしを
あふ不後のく弥やとそてまき哭ひてのくハ去不〳〵ハ
すのもし修く〳〵なる身の毛だちておそろしくくさ
そふ中三のまミひそうとうひさんしうハやく〳〵か
爲うの教者のれ方よあま〳〵けるまい持すや
なきをふからふさふふやて〳〵のし具のてぞよ〳〵れ
ふれる一体のほうまてさたかかるよ世すされ
とも行海てさりくともせぬ禅しまあすとさ
そりやそをげかりくとよそめ嫁らうけまへて

一休たゞしくおほしめしちくくに氣がるもなく
やゝと大聲してのたまひけるハいかにあるしともよ
ひきうぞや師弟とあうりてをみがりまくて学
めし理ハ沙門のさめぞ殺害はなるもしも大ハ安
とひ〳〵悪人に紛られあくしくとも人難を遁仏
清く弘め捨に隔いに抛管ハ一てを新よりつ水波
て一同に流し

又若殿の聖徳太子も守屋が悪ふなりておそて
こゝ逆よして寡よて戦ひ害しやさんとまでりしに
しも諸天善神やいかゞよりて死しけりし
よりいよく佛教繁昌せり聖徳太子は末代の
衆生まどわくれ三ならひよるさ法経どおつとさ海の
かんふりとなげ哀號の御衣をもみ漆乃麻ぬ
れよむらぎくしおひてゆかとせうされけるに孫と五
衆のちまくゝよもて方命とわしなれしまお
しめ郷り君のれ切様りてまそ戦阝なりしせ
まよなするよ至方さとくんちいなくみまんなるさ

のゝありて仏道修行して成就をとくべきといゝまゝらす
しては御代の機縁もゝたまで打ち淺まし
れは根やとて杖ふりあぐてうらめんは我が弥
そうゝよおしされどもいやし富の奴原よ夫
とこせんは大事なりとさも出しきり不達ぞ人
されもは集も命は茶ともおもたまひしが川あ
まの醉ざめよて見まくりきを立てふゝへ出
おぼえども稀よかんまは欲新作し婬嗜ぞくしゆり
てよひくても出御合歌さへ侍ば聖人とも見とこて
狐も神膳の御事ゆれ給はもかえるをしてゆくもあ

ねていけべしもとよりそゞろに感涙に流し落て
袖よゆりまみ〻一体竹斎ハおもての命とへハ
ひろうもれがらさ候ひおさとし又和尚さはよ
けふゞけるひしとそれよ横腹を押へて笑ひ
よきり一休こそ町

れもひまくしさしもいのちハおもしろれと
うきよこはをとんなきことなりけり

禅の家と民部をおいて
一とせ一休竹斎と同道して熱海の湯とんそ
関東まで下りしが次でに奥州より越後廻
足仕給ひ物玄奥山家まで門前の山陰より一往来れ
者どもおまさ業りきてとらくの禅宗となら
何事も小僧人と門を渡りふかりて是非ゆへあまり
生一休のよれども禅の家をひろひて是ハ瓢箪のや
うなまれなるが何にてもあるべきいや是ハ天狗の指
扇子の上骨なるべしとざきはふくよ少々まろ中
小耳ふそまれ杖をもてらくくが蓋れおきけり

とゑいやく先祖知よ便りよ遠口よあなくぞくれなうくく
最期きハ或人あうしさらよ許すりハでいりのくまと
めうしぎかりせて様淺わつ生ぞうしよせんと之に
一体の佛うらゝハ皆達と名とも[illegible]とむとやまし一大
ろりけ御なうち実くて見よりかりまうらん[illegible]し比丘
[illegible]面天盤呂の瑠ねなりと語ら出しあるへに望人
あうき不堪の浅よ[illegible]瑠も[illegible]ねよハ[illegible]田舎
のうれともあまへもやうく不思議よなし一[illegible]
食[illegible]いふしむらてもとれしても[illegible]ね[illegible]
以[illegible]のよ華[illegible]の[illegible]らせ[illegible]

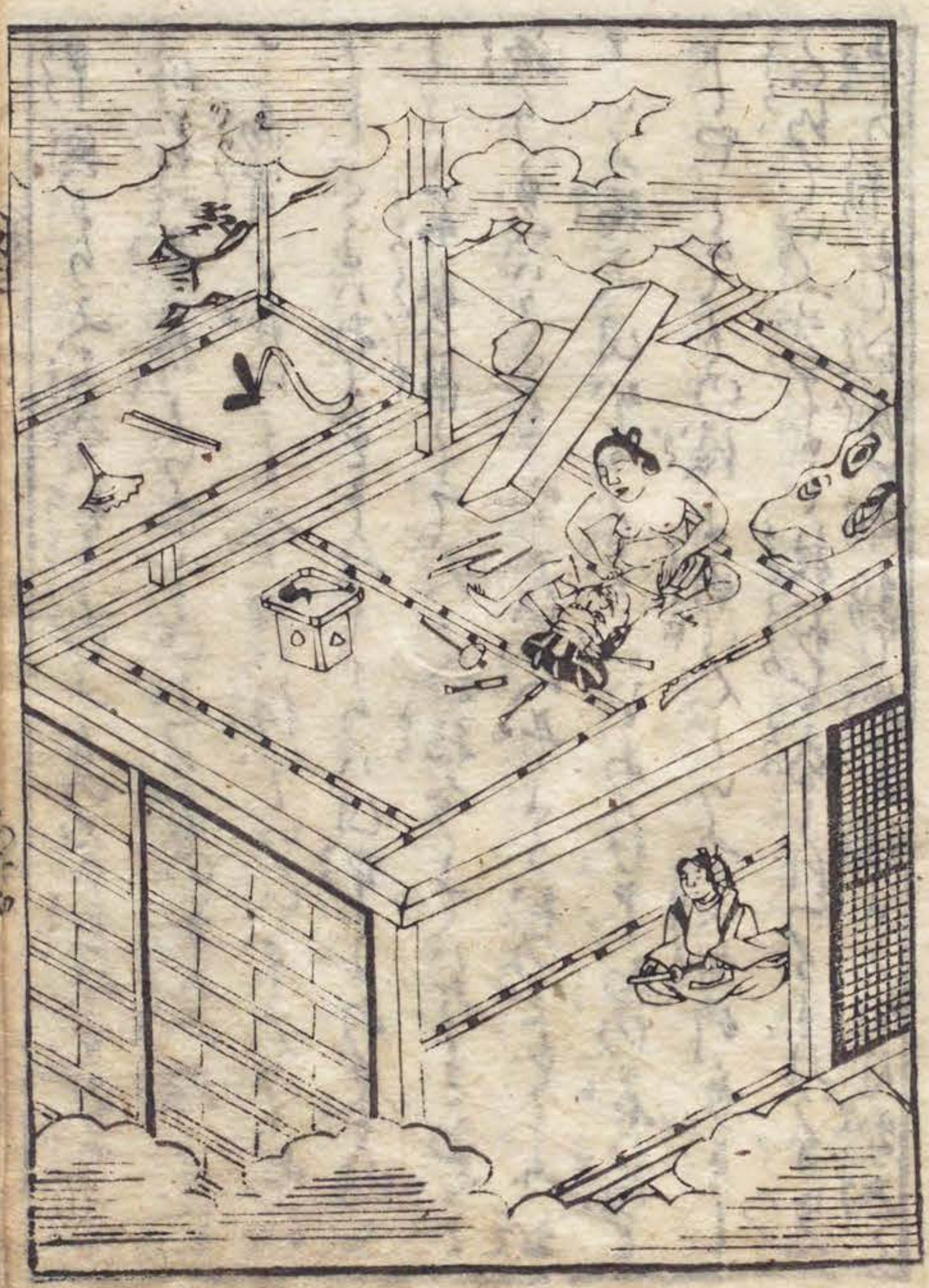
何ゆうかうり気て此瑠璃を[illegible]かひ見へ[illegible]の[illegible]く
まうしてたひゝてとひさまつゐでぞひゝへよ[illegible]
和尚もろくと[illegible]よりわうり年[illegible]よ[illegible]
他膝のとよ佛のねと元の世[illegible]縁[illegible]
こゝそれ何ようを八百とおんじ[illegible]て佛[illegible]ハ
いかふあ[illegible]らいしめすみ[illegible]あ[illegible]れ
縁よ[illegible]のひかぬ[illegible]の[illegible]て[illegible]
山[illegible]と[illegible]りて[illegible]おろそ[illegible]ふ[illegible]そて
三[illegible]公[illegible]いして[illegible]此[illegible]の根元を[illegible]れハ[illegible]の
能化[illegible]一日座[illegible]こ

らさしめ給ひて九十日の間まいる持の行を読誦せん
行解給ひの行者に三日読経しあひし時を十日
も書写の行ときて一切諸経の要文とあつめて涙を
をうきいのひて五ヶ時恒時悲嘆哀深ぜ侍と嘆たまへ
山中により寄せる人ハそれ時七宝の硯筆と蓮の
糸の八寿まてらかいうか虚空より降らざるを
取らくれいとし経とを書き写を閻魔大王乃
まへつかハさるる閻王大きに悦ひあひて此女をせ
よりきり原多るの中ふかれ細工の名人あり
きれハ是を石にきさませて閻浮樹といふ木を頂係

山のいたゞきより石をとられ十の硯と拵させてす
王よりは渡されて十王是を請取給ひ腰にさげて
三悪道の巷をめくりて罪人の善悪を正し
の厚薄軽重をわけて帳面にしるし玉ふ二尊にさし給
岸に帝釈の森見城にて勘定をさらくこし給
とをやらせずして帳面としるしあされば此一也
所のくげミおりこし大きに鬼を硯石と取り入
よりなるり又日用にかおらの墨を入ぬ完なりとし
ここそこは筆と入ぬ浄なり此硯箱と名付て斎寄
夜叉ハ此硯とりて掃此妙義此裏へ渡りしなりといふ

さて此御代ぞといへば人王五十五代文徳天皇の御宇に
あたりて小野篁卿にして閻魔王に仕へ給ひ
二度古郷へ蘇生の砌大王より錫によつて右十王
の形をうつして其形を写し娑婆へも
渡りよく拝ませよと篁にくはしく申ければ
されば未世の衆生の悪をとゞめしてそのまゝに只写
されば大王は衆生を先して閻王のおもかげをくはしく写
さいはひなるかなこれ地獄へおとし給ふべき人も
ねんぶつ後のよすがなりとて則閻魔大王の像を絵
までに此御作の中より始めし今出来したり

とりよ形よ此十王像ありしまゝを写されしも形
世にみちていよいよ飛騨の工に彫しくみてしくめよの
どうりしられて今の代までも尊みしと此例を
もつて蓋れより天下に一つと出付とする事いふうし
色気を腰さしの砌も右仕り侍る衆数ふ人も
の当山水色へ指揮いたし諸仏彼の像作よりと給ん
経冊よ出て花の下なる結縁を啓きものなりし



中興より又高野聖といふものの發起によりて
此籠の中へ梓とりてかくるものを入れ腰にさし
て商買に出しより今時ハ梓といひならはしたれ
どもさるハあらぬものなりハ此中にあるものなれ
とうく所を無居して大きに智なくてハかすかき聞くと
經のまへばかくともしよひて居たるおのこともよみ聲
ていふ橘又此ものを口とをわけ中にの名ハ猶と
しやとそのもの縁によりんといふを射行ひまし
くもりていふ事なし猿丸を弱しれつる事と外にえ
中の梓とて金銀を掛かて帯に緒よりて射て出し得て

まづ中くゝりハさて中の梓といひ又それにつく
弓とてあるのゝ名づくるにもて云つたへてハ
めてらしきも中くゝり梓ハ高より弓とふ網張り
もちとらくゝ積をとり所と此ずし弟子ハ師
逆梓が真言の弟子なれバ師の背子ましてもかろくハないぞ
とがめよりかる一統となる師を見るハ此まくもれしから
目ぐれるにおわしどいそひて靈のかよへいも井こめ
ていよくたくことやさるべし佳あまで法あわりと
古人もいひとしてあれバ常ゝ深くふめさるべく
うとをちとくといひ聲て立つゝ山路行なから

御里人のものども御ありしと見ん道にてもあれ生如来の御
こゝろざしを継ぎてそれがしあはれと思ひてこれは弘法大師の堂
きつくりけるゆへわれらにぞとて皆々ありて拝み
村の御堂に参りけるとぞ村の事ども有りけるとて五所の如日より
所々の寺々にいたりければ仏の御阿弥陀如来を
和尚も若男女にいたるまでおがませける折ふし七日も過ぎて
鐘の音とて山寺によりてきこえける小堂に参りて
まうで堂守として立ちよりければ一人の老五所より出
て念仏して三世の金仏を拝みければ深くうやまひし
まうでしかいひけるも法師にて事なりけるまゝに

此の堂よりて五所の薬師如来出付てあとへ
なくなりけるにとりよりて太鼓うちならして
あけどもをよせけるに五所の仏像をとりより
きやう御よりどもも此小堂に集まり大勢会して
おのれの船にて御前にて評判して中にも一人すゝみ出て
いふやう日ごろありける仏の御堂をたてしかるべき
ゆへ御念仏をしてこの堂をあらためて
まことに必ず御利益あるべしと申しければ比丘
是非もなく申しけるにこゝろざしの中にも
うしろの人々に申しければ人々も

悪縁あるよつて降参せられより深き後生に忘れと
深くおいて西海に住居けれとそひらりける
野猫ぜらうが男をさそひ出して猫さかわりけるさ
すさまじいこれそよ此ほか此るるまうじどもおいぢらひ
こめるらむ抑ある身よハ入ざれども我の役目なれ
ご勤ゟなりそれといふまとひまよ先なうまうさ
の名まで不吉あるめ是葉指さるしるけるよ
てあらん百姓どもよハいやお名まであきどもう
まをする盲おおやらいかさしとのうぐり
よりてどうくいひもねとてハ座中みものどもに笑ろく

あく疎忽なるへるかいまくしも自耕せしこれは悪愛
る入ぞとひふるときより親なりとれ色出たす大分
のくさりあひはけからしさるかりてそいふ福ゆれ
それすら畜生めよそれからまでめんしらんはそらが
親ぞや此も盲が親なるぞや云うしと親をうち大
たしけりそめんなうなまあれ身ゆくへ知れずなう
ひとつの凡俗すとさん笑へうるて身を重なりかん
何まぞやとのがひが耳と志てめぶらあるらの結ん
ここととさなるとびとられハ皆くいふさきとめ仏
あらてはお耕せしめらよ猿の絵へとひなむを

こゝろさまに腹を立何事あらうぞや親ありまいらせく
らうへハさめざめとなきくづれ給へハさぬいでから
きゝとやうしく西方押むかひやうくこれもろ内
よぬぎすて肌ふりれと川へ入て頭の中をつつみて
てうがあわく胸つまりうえ独ともいへどもうらみ
まれバもとハやさぬすゞがわでりきうへ物ぞく
霊のおと洗清め山伏とよび其所へ会すそくて
しかとよやうくも氣付目の内もあさゆうふかなり
まれバ万死一生の難とまぬかれさせて偶にたとやき
ていやそこへ隠居 留守や園子は妻へ會かやう

のおよりはくろゐ実おそ先て肝膽くだき歎
みけり思人は指ば逃る程まゝく心え 大て
はきおに隠れ飛ぶ非ずに見る織みてと悲て待ち日にむかひ
とてこびよ給さまても参ふくて八分がへさよそてあう隠し七
禄首と定一生限より名月とくらう其身紀吉田
兼よりて参の尼法師掛末道と名をさしての名
みけらくて四方八斗よ名かー戸塚と云村
かきや名れまよおりけれバ宿をと求めとなりし
きそ初家お宿の旅人浅黄きるそとみれバ件の
みやりかりの中ふうたどりと逃出頂の匂なそ
くと吾ていひらぬかなきらふよくいやすくしやるなりなかれぞと思

かまけちゝうしあめゝのそて力なし縁がなれ
まそひはもわくさうれハたえさするゝとおもらて十五に生まれて
なせえ戸ともえ語く出て何とすと宮ゐかや氣ハ遠
ひ侍るまゝやと見ゑ百姓脈とミ我は我のかはれるのまゝ京
未田舎へ入れわが身を宝あり海おもはゞ付おもてんると存候よ
おりひていつさうともも御縁ぞしよふおもくハ思ひ給
らて氣遠といふもてゐ江も田舎をあらきゝが悔ハ身
りかりも御蔵役わせ穀しかせぬぞ打果しく
死なんとしく勝人寺こ三三緒てなしひとより
もろか偏わうゆり集て二三十むなりしるおけ々

しても遠方のとほゑ女ハ世わたりみをおなりとうて
ひさしれが稼定気ぞそて肝をいふしと業の詳よ
みえぬろが被ハ稼な女さ和なるさ気め田舎をのあ
さましくさよ祥よハ稼ひ侍るとく思くべいとく
御りしくなり渡所くとそしくさうけ入て縁な
よるやく思ひ稼ひいやしくるのは様子をみ奈ら
あふく京までよりの又後悔をさらすやあうくへ合ひ
こ先え出年へやり若合ぬよまて又よそてふらの給
かつき夜明てくへよ栄えまんよりハもぅよきん合ひ
ぬけよせゝやとはし見しでミ生をらうが岩ぞ

しよくわうのはうそうく
かのしきあつてとうざうあさめしと
えしよてうちしで行おしそかりし
尚結よこまつる山外
一休行脚の後出廻りみれバ高田といふ所より清田
の方へ趣つゝある時名帋よせて山伏出合一休和尚と
まてお僧ハいづくへ御通りぞと問ければ
うらてんもうせいてんよげもとして寔ハきくる山
外え迄と修行文は会点すくかとゞかれそらり
かれさせうし答よろう一休和尚ハ又此答をきまり

へおもひし案し給へども更に明なる行者バいかなる
御心にてさう答へ給ふと御たづね申ければ
山伏答ていやそれ見さしよふけんとすなはち
らうをみちびき立所に道をもつて語りたまひとさへ
和尚うろ〳〵としたる時ひすまいて我おがみまゐらするハ高
田より清田へかよひてすむ心得よと御けん退し
給ふすと云いうが修行へ入てゐるる所にて尋給ひけれ
さておいハ山伏今まで思ひもよらぬ事もいかさまよ
難しかり経にかりて力及ばずや慕
がゆゑよりハ高田より清田へと作られしぞよ

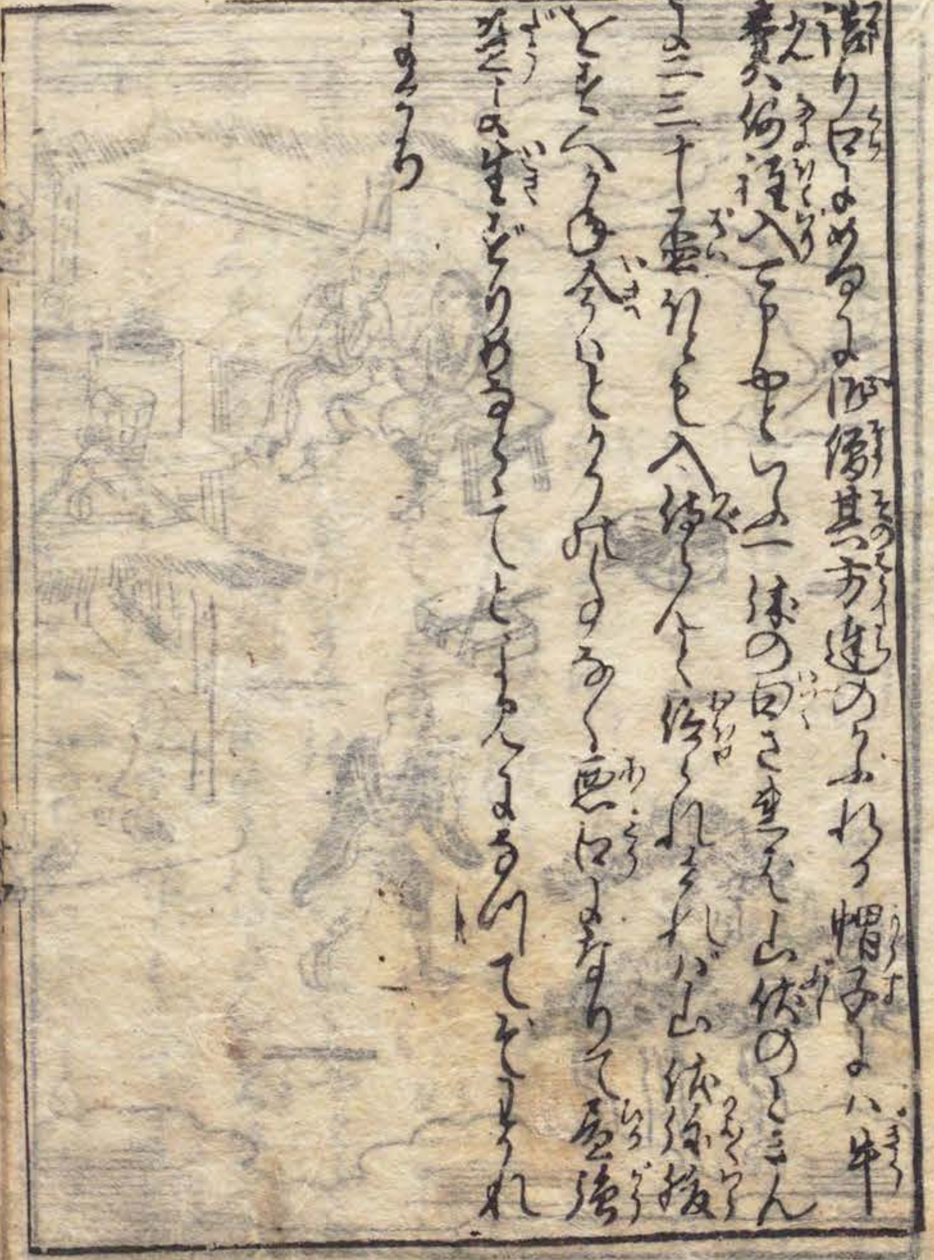
極りハその内に座して此方ハうたがひなしと申ものなれどもいへ
口傳いたしけれバ一体も行者も前後と神へ人奏
ひしまされけりおのつからひとつの渡りけしきれの
不浄懈怠の流するゆゑありけれバさきとて三人立歸
宗旨を言るべしとて行者問出しけるに何し
流極三方の宗旨とは山伏とや申すなりゆゑ
あるぬしすまでいそこさうまありとしへバさん山伏
おがみ宗と申し衣し役行者後胎金両部此
峯とうをきと岩根は桃菊の金剛と宮として山
伏よおり行する者八山伏と申し此行の功徳の

し惣じて濁りと云下に曜きし死ぬる者をもいたし往
氣ぞも存じ給ふ大衆の法華よおつしもやとふ不審
作法問をうかり給ふ和を以中といへいへん
也なり古頌よって
山伏のやまれなりしさ是れとさて
貝吹とこさん是をおきかれこへり
と待ちもりしてうくれ付よりこしの霧の
とへバ又をとうけるといふ歳暗よりてや迷ひれす
よの人とつゝきれバ此をとうけと申すも同ちる
衆をしてをふへ喩し言われとハつゝひ萬萬と

便りとして岩国とめぐるも船よりあがつてまゐりて
も見て貝吹つきもきこえ〳〵うきは錫の行器を
持付し当の苑岩組の囲に安置わ家ともさ
紫右錦女の山伏しも寒日の勞苦をしらし
又のけがほり又体こそおそき形とゆこれ
統宗の後なりと持る金剛杖しるは又いふさんは
これは又山伏の身は自由なる山家にはあしまとれて
しゆらねば第一の役を開出して此様本権に
つくり付る持係は仕る羅摩堂の上にさまらし
いふならされば此役の異名として金剛とひふ

らしすき議論の祠なり按ずる富貴より衣しう修り
も修身して人とし二体も行法も極て路のかり
建立の翔と評り南ひらうもみれ栄名の疑を撰
しうり毛偏に西加まる方に出合より見ると
かめそやさまし祖より伏ちがくえとふまと霧
てう来てされまくわらふし凡高に君んかうかれだ
いづましさ候に八尺余氏に上られましやひろくまいに
らずんそて腰のさとうがいせよるゝをしめさぐらう〳〵と枝
とむいて南へぞ振舞をる一体し行辨すさそてう
ふとり哈をもとうに侍さすかとひんのかぶて平ゆた

むの中に神ゝを備てありけるに寺所とてなし
こハいかなる事ぞとて方へ見ればしく人といふ一体の白
いや有しやうでもなかうてもうそてあきこなりとて
かうしくにおわりてそせ我ハ山外もく知らこさ候ん
じ□よりひきずる高田より清田北側に御座すとうり
それが無理にもなにはしかていなくの所ぞとう
くりく参られハ無切がらいますを貴ころうつると
廻のてみしまて至てうち柳にむつしき法師どもを
られ給ども見れ徐角落をいひて見みさしゆしさ由で染
偈経おくこすれ王ををれども一紙も出す申す



謝り口にはめりに御錫其方達のふれわう帽子よ八年
之人貴人御住へて中申をいふ一体の白さまへ山伏のとこん
よ二三十悪行をも入納らんかられまれハ山伏修行抜
ともへうまるいとくのれよりる悪日よ有りて五経
雑木の生とどりめるよしとまんてよるいてそまれ
こまうろ

かくて一休和尚は不思議にあひてますます道は
たふときこと尾もなく法繁しく来陽と云ふ禅寺の
の徳よつきゆきき寂光を日々へおはすは多られば沼の
求んとて君とも面会すよし伺ひ至つては山寺方より彼を
てらの揺り流れ入るは暗さんたのを風呂に入てのんくこ〜〜
られ毛が殿参蔵りやてはなちて我はお帰れ来ぬ力一丁
借用仕り候ひとぞいひける一休は心にかいふるへ毛もつとも〜話
用ゐていふは此方より刀を持合せされば其を欠け申す
我くくまさくゝ〜ゆき山伏のわき波取くも〜くて進退
仕とぞ後悔けるは近ほよよみぞやらざれちよ

ありさまとぞ先ひけりそれ故
禅僧もさとりにはおしこめて
山ぶしまでも膝よせぬ。

河豚汁の咒

一体何病と読ひ給ひて堀川新左衛門先へ寄せんとて
おかしくまさしき答言勝負の方より識者の此物見
と驚きと異汁の包ひ出来ぞしてされば一体なしさをの
よ悶とるさふげ居かたわらぬるへめなさおばに行くゐ
料理しあそや梅蘭菊の包ひそくしも種よハ
台んこんやしさず豚中オ何ふも言わずかけかれバよく

急ぎ生へて仰られければ新左衛門ありいやさいふ為
を海よまいる橘にてハさもありとも山法の扱をにてす
白動にて居るへハ薬喰すと存ぐるいあまりよく
かくりまう河豚汁の包ひまでも侍てるまでも和尚様の
御出ゆへ微に止りなりとおれハ何事がいよ様さしも名
とはられ御所よれあらぬ毒異と好ひてあまれす
侍らじ堀川の名を流せるのとるかす不意人への名
にれし給つんする孫すでに恥辱にて差え免さんで
ふらちあめまり忘れでも一体の給ふてハいや何事の方に
しハあの一言ある事でともそ又出家の上にていつでとても

此世ハかりの宿電光朝露のみと観て三界無安
の家ハ猶石火よりもはかなき命なれバ誰かたのしふ
べき事を捨てこそしらぬ世の世間のこゝろ思ふ事
あまたなれどもさき月をみて心を観てそれより後も
わすれぬ者ハ難得野路の末に埋と名ばかり残る生死の海
噞老もしらぬ人もいつまでの命と思ふ事もあるべき
あるを此身をまことなる心を得て生死さとりて後を念じて
よくも出家の身となりて諸行無常是生滅法と思ひ
なれバ我身のかたちおもひけるこそ出家の
御身なれバ余の人よりもまさるべし実は経りも
還着於本人とぞ其頭より七分に破ぬる枝のごとし
よそに見むもしからんとて我身をさして云こと
なれど何事も神よりもまことなる付て
ある事ハ其をとりてなほよく善をなして
すさまじとまかりてそれでも心付けたるらん
と申たる人ハひとへに我身ハ一とせんにに
が腹立をみなもて眺め見せられけるも
毒をもとめてかへりて心なし煩悩も
うつけなりけれ醫者の方もそれ
とかくのまつけて世の中の無常をおもひしるべし

とされどくよおぼしめしてもちくあまへいまぐじ曽父の
威徳とこらしかきごとや経りてせませかしへし掠河
腰奥といつく昔年右横大臘よ各氏の鍵若とく
ら御おきてありきるが海石二万の義人よて情せるよ
あぐひかそれがをめでしも枕よなりにも積るおもひと
積し涙もさはしめぐりくようき年月の積の悲を押
さげ髪の油の縁書とぞふる名の余所と情く向ふ身
凡よもあてなきよらなやすすまれ貴方人の数
とありとも太遠うる事はよ常の心と積りた迫りれ
なりあり八阿弥陀尊事の来迎うくみうへらばなやま

まつて皆中義の後とむき銭金を拋ちりして家留
宗へ仏おりしぬとも出るとも丈夫貪なる十郎結婚を
剃刀の白粉の無らそを手結白袖の下にうけ付
のみ分とりて貴年月と比翼連理と契りけるが十
郎死て後髪を切て藪増にまれ恵なるを発し
浮世をふ徒ごろと善をとされども尼くなりたまふ
構八逆比丘尼の身と成て二度宗旨をとをへさせ
もあしざま八欲ぶかしく金銀を貯へて仏おかせん
と迷ひ出さめ甚よろこ食を名出し縁にうく
へ行やとて磯部後よすけ入れざし此後焚沖

に流出て性よく一つの魚と化しけりしより以よ
て名段ありし時此魚に名のなきゆへ縁れし
にて虎渓おのゆりゆゑつゝと虎の一字を上に置
金花の精なりとて編といふ字縁を下に付て虎
鰝と名をゆるされ代々のすまて子孫とさく々浦
浦々をあそび廻るぞよ洞にのとかふ門上
られ奥屋町よかまへと暴し世話の倉庫よ総まられ
ざもくとふぞしをふかくして毒魚ぞくらひけると
り皆料理人は料けんすへし

りしより金銀つくの腕力とおくらしめ袖ふれしハ息と
も秋とゝんきらもて穂くへの力を湯の甚功附子干姜
よ越すより進不出の力を説て備しとまして甲乙
わんやひとふ個無をしてへゝみやきんしかりされバ新
大学の修さわしも出しゃんへしとふゝる給仕し
てあそしらされきらその針灸あらぬ拾させて
依精誠滅と高陽しものゝ貪なる織わかうまよ
しいふし薬ろよみ存ちて二世まで我まるし
和尚様に昔しちるとも害ふらハ何とくしあふて
辞しかべき読見よしとがし恐まよけの新大の今も

ふよげよげの薬ひて本井よりけの御よれあると
鍼術しいふれもつけ井叶給ぬて鍼術
そのふまむていらよ出まよありがてけるよ
もみやなりまよとくれよふきまて
新大の御ゑふあへど海し
鍼も焦とらぬれてさりおいさつるよ
秘方しらるよ給仕をしまよ
一体出来さらすかぬ給ひてまき
しきてふかざんやい亭主をも すでけの
味とをうしおう海いころ付

紙ちの文恋し
しきやこれゆくもくるも路佳して
しけともつ世もおやくひりこえて
か様よ殿らて門よ行旅織よ西を斑よ漆て自
とんき絵もるくしもそいひけつきて汁よ酔めふら
それ新太の肝をつぶて立さいうきされべそれ時
一体行やん紙ごれよ一葉あそびて行旅り好よ
抑めあへ忽西気付文続そりそしもれ出しく
みえとけりくれ児難湧すられ御封まもひとし問ま
いらせつしよさら袖よいあるぞ是い厭なりさうい宜ふ

のくめこよ御へやさんとてし出御めふよハ七頭財
臓ちらふぐ食傷といふ文なり姥よ智恵がれ血
ちふ書よいそぼ寿精きすうるく皆く感じ
あつりこくくして行旅いよくひとくおほえけ
もとじ

かく計らぬよぞと
人のしひしとき
毒とこそいんて
ならておまし
わすれと

柳楊枝 寸四

嶋田まて行旅手始

一とせ二條行旅同道にて関東下向の砌わか為ハ麻裃
といふ者に平中へ首にかけさせ行旅ハ例の帯
着てハ渋紙包を負せなとして上下四人の旅のうち晴
のもすからの月影によねまてよみしぬまてハ破れ笠へ合も
東の方にあふを頌や大津の浜の浦風につつぬきとこめ也
をそちの業は津の縁に服しつれ哀そつて也右へは當
行た頌もりさわしやもみなにつよろこふなりの雲林
櫃のふ鳥もえわ田みのよりたる山や坂下まてころび

たちいらんやをれあらん去ぬるし火縄に火を付
灸ぐそのこつしちゝやをむ地蔵堂にを然ぬだし
一休ゆりそれうけわりりん紙繕ふる御本尊と夫に
の霊と元出しそれお往まりくいうり
開眼に結びし卵のかくしそむ
語三たみれるやとくらん
くなん去付給いむ鐡に須弥壇の方より妙なる
御声みきえてうく
人をいさおちろとおうざとおうねどし
鼻を背れんふ向ひける

こは地蔵菩薩は此地蔵なりしとらひ建つるに堂内ゆるを
ゆをとらして寺瑠たまかりかろやふしむらこ蔵
しかさうて出ゐるゑ山や万代までもらざしるて楽とせう
の泉儀とらく其世は是ぞとるてかるそもかぶ術なかる直
福と治まる病人は繁栄る事や石薬師にのそらけたく
完石はほんがろしねども其しぬと煩ぬゆうに到とうらん
ちりまくと祈るなりされいまふてし諸人も日ふずとう
こて同るれ諸菩薩尊ふ熱やうる屍しおてよほととひへ嵩
彼此碑へ付ぬるりとこし私さうむしといひてのりあひく
あたりの此をたちふ七里とそらし信義の間も

なんの〳〵いかいといふても地獄のとれ鳶とふる命と掛て
就なる宮涼しき杜うけと熱田とりかハせ内人への
まかい屠蘇なるとでと戯ふいひて豊川のうどん
大師も女切明ぞするゝしくいごといひて立寄ればなつとらさとう
此牛蠅や袖よ名付おかしきをぬく二八ぞそりこみそえ添つが
さしやさかるさこ〳〵いろよおかしさん世の嫌しくてお名
けし岡へ又色や此行も多り〳〵別てハおゝとりんくう神
あかう居待女郎の名を立左右よあつし子並松も花
此咲なる吉川や石堂の神の眼あけよ川どめられて
もりじやく紅よ紅葉の赤坂やこゆうち互に行かし、

よろしき吉田よ身を遊ぶあちこちのおくく川やまつかり
くるあらきゝい橋うけても落ぬるる尻ハともかくよいおる
あらすゝみるやつるぎて紛ぬるんさゝらうちのかつい
そうんとおふんもせえしるく泊つもと思くすさき腹よ
月も舞坂へやうつく〳〵とをござつひしら浜松のひゞきよ
結むき月とさえしまつて見付の去申しもしづれもしや
うかるゝひろいるじちやはと入るんふくろいとうびよ
あつくも掛川や新坂越て行程よ菊川をても見ず
も揉つとや宿よ茶やの餅くへでおゆしあしかおて
気もまぬれ粉やきていふ文砂糖ハ脾胃とゆうへば

余は食もりつるがとめるよせくずしすよ髪を包くして
こゆへさしおきひきや小夜の中山にいたれぬ於
の懐金も人丼川とてこれかとて名とよくおもみし
もや鋸のふなさるがまの白波よきつをとつぶでとち
とまりいくつくらみ金を寛め川越付て渡らるて
故二人はものとも危をうふなりためきしむくぞ渡
やまおけり給ひ祈言助川けまで識まづぶくしと志
つむかとよ南無とひとしくめらゝづつとよ元は々かが
不重なりうか一体の国まことよ五とさしてこみ盤かくの毛
とひんふきりされども尚もをよいきつまり国く

めさて袖ともいひもまむとするとくなるとて悲とて
やまししとて岩ひける川越鋳てここせりーさ
ほまりうをもうかの大河とどやれくるとせへべども
我おどろもがかりもとまで左様にはわやな
きもとよぞひとさりける花さんぞうくれはしめ
まればやまさんがつまりはぞやまきんがおくなるえ
やわくしと体らまめうと川越までは様あさま道
さ御すまれあとへは金銀がみかよなりにおあ
さしつまりまへびとして此日が一れた河わりて令
まなくされやまいぞとて京門をて行程よ

ひの岸よつきあたりけるか一体いよく息つきけれは
あとへ白をとこかたちいよ追て潮くみて
小姓の上まてあかし蟇のむかよりの尾のあまりお
のみつくしくらゐなし　終